

米田キャプテンへ

米田京子

1. 動機
2. インタビュー 「持ち味を生かすとは？」
前半戦 ラグビー選手として
後半戦 日本語ボランティアとして
3. 結論
4. 終わりに



1. 動機

私はボランティアで2年間日本語を教えてきた。そしてこれからもボランティアとして日本語教育にかかわっていくつもりである。そんな私が「わたし色」の日本語教育の核としていきたいのは「子供を育てた経験」だ。

子育てをしていなかったら間違いなく今の私はない。子供から得た貴重な財産は何か？と改めて考えてみると2つあるように思う。

1つ目は新鮮な視点、新鮮な発見、そこから生まれた「活きのいい言葉」。特に幼い頃は数々の名言を残してくれたが、高校生、大学生となった今でも彼らなりの鋭い視点、そして彼らの口からでる的を射た言葉にはっとさせられる機会が多い。

2つ目は彼らが自分の置かれた環境の中で、自らの伸びる力を発揮して成長していった場面の「記録」と「記憶」である。写真、文集、学級通信、そして数々の名場面？の思い出・私自身がひとりで経験することには範囲があるが、子供の人生というまったく別の人生に立会い、見守りながら、私は経験の幅を広げることができ、子供自身や子供に関わってくださった方々にいろいろ教わりながら私自身の視野を広げることが出来たと思う。教える側に立つものにとって教わる側を観察できた経験も貴重な。

「子供あつての親」と同様「生徒あつての先生」という考え方をこれからも日本語教育活動における私の持ち味にしていきたい。

さて私は今回のインタビュー相手に「ラグビー部キャプテン」としての次男を選んだ。次男は現在高校3年生。中学・高校とラグビーに打ち込んできたがつい先日引退し、今は大学受験の勉強をはじめている。私は次男を通して初めてラグビーというスポーツを知ったが、最初に試合を見た時は「こんなことやって何がおもしろいんだろう？」と思った。ぶつかったり、ころんだり、踏まれたり・しかし息子は5年間真摯にラグビーにとりくみ、ラグビーを通して、彼は母親から離れたところで勝手に成長していった面がある。スポーツセンスは平凡な彼だが、「弱いチームのキャプテン」として仲間を大事にしながらラグビーを続け、引退に際しては大きな名場面を私にプレゼントしてくれた。

2003年4月20日米田キャプテン率いるチームの戦いぶりは、応援に駆けつけた先生・OB・保護者達を仰天・感動させた。強豪相手に必死に食い下がり見事なレッドヒートを繰り広げ結果はわずか1トライ差で敗戦・・・引退。私は我が家にいるときとは別人のようにたくましい息子のプレー、そして試合後大粒の涙を流しながらチームに語りかけている姿に驚き、圧倒された。こんな場面があるから子育てをしてよかったと思えるのかもしれない。

自立していく息子達。これからはそれぞれの人生を歩んでいくことになるだろう。そして私は「息子達からのプレゼント」を大切に私なりに頑張っていきたい。その為にもここで息子と話をしてみることで年下から学んだことはなにか？について考えていきたい。

「ねえ、どうしてインタビューに答えてくれるの？」と聞いてみた。

「それは、べつに答えない理由がないから」親子丼食べながら息子はサラッと答えた。

そうか・・・彼にとっては答える相手がたまたま母親であるということらしい。

何年経っても一向にラグビーのルールを覚えなかった私をバカにして、ラグビーについては深い話をしてくれなかったがいい機会だから色々話をしてみよう。

「それじゃ、ま、よろしく！」

2. インタビュー 「持ち味を生かす」 とは？

最終試合での息子の姿を私はわすれない。「いつの間に、何の力でこんなに成長したのかなあ」と素直に思えた。

さて我が家は親子の会話が少ない方ではない。でもいざインタビューとなると「どんな話から始めればいいのか？」と戸惑う私の前に息子はなんとサングラスをかけて登場。

座るなり足を組んで 「えー聞きたいことはなにか？」

思わず「なんか勘違いしてない？」とふきだして、なごやかにインタビュー開始。

えーそれでは伺いたいのですが、あなたが中学、高校時代5年間以上真摯に打ち込んできたラグビーの魅力とはいったい何なのでしょう？

一つは楕円形のボールの魅力。あのボールってとても工夫されていると思う。ラグビーをやっていない人から見るとあのボールは「どこに飛んでいくか解らない」なんてよく言われるけど、うまくなればちゃんと地面に落ちた後どっちへはねるか計算できるし、素人が投げると飛ばないボールも、ラグビー部が投げるとスウーっと飛んでいく。その快感はラグビーの醍醐味！ もう一つはチームプレーの魅力。「ONE FOR ALL, ALL FOR ONE」これがラグビーの基本方針。一人はみんなのために、みんなは一人のために。チームがまとまった時の一体感はずばらしい。「自己犠牲のスポーツ」と言われている。チームプレーの醍醐味がわかってくれれば全然自己犠牲が嫌じゃなくなる

* 答えながら息子はすぐに飽きてサングラスをはずした。楕円形のボールについて話す息子の目がキラリン・・・うん、やっぱりその方がしゃべりやすい・・・

私は今でもラグビーことが良くわかっていないし、あくまでも一保護者としてのラグビー観でしかないのだが、とにかく私にとって息子達のラグビーはおもしろかった。

ラグビーは個性的な選手の集まりだとよくいわれるが、息子のチームメートを見てきてそれを実感している。特に中学時代のメンバーのキャラの多様性はすごかった。成績がほとんど「1」だとか、いわゆる「不良」と言われている子、優等生で理論家、足だけがめちゃめちゃ速い子、まったくやる気がなさそうに見える子、太りすぎていてほとんど走れない子など、とにかくさまざまなキャラの共同体。ラグビーを始めた動機も「入りたい部が学校に無かったから」「他の部がつまらない」「ラグビーならすぐ試合にでられるかと思って」など統一の取れたものは一つもなかった。つまりラグビーの精神であるという「自己犠牲」とはおおよそ無縁だと思われるキャラ達が、一生懸命自律的に練習し、試合となるとチームのために一生懸命プレーをするところがとても神秘的で、それまでまったく未知のラグビーというスポーツに魅せられ応援に行くようになった。そしてそのうちに、チームメート達の見かけとはちがう意外な側面とか、「不良君」のものすごくピュアなところとか、それぞれの持ち味がみえてきて、「共同体の醍醐味」みたいなものをラグビーに感じてきた。ひとまとめになっているようで、なっていないようで、またなっているような・・・そしてそういう視点で見始めると、チームメートひとりひとりが本当にかがやいて見えてきた。ラグビーは持ち場を与えられた選手達が、自分の居所を見つけ、そこで自分の持ち味を存分に発揮しながら協調性を身につけられるスポーツではないだろうか？

そこで質問。ラグビーとは自己犠牲のスポーツだという。試合で各自はチームのために黙々と持ち場の仕事をする事が求められる。でも個々の選手が持ち味を存分に発揮することも大事だともいう。自己犠牲とは持ち味を消すことではないのか？

ONE FOR ALL, ALL FOR ONE ってどういう事？

「一人はみんなのために」とは自分の持ち場の仕事に責任を持つということ。ラグビーは持ち場によってやる事が全然違う。それぞれが持ち場でチーム全員の為に一生懸命自分の仕事をするということ。あと自分が何かしたことによって、チームの誰かが苦しむようないい加減なプレーをしてはいけない。たとえば試合中に自分が相手にプレッシャーをかけられて困ったとき、味方〔特に下級生〕に責任転嫁のパスをしてはいけないというのが僕のやってきたラグビー。「みんなは一人のために」とは1人のプレーを支える為、たとえば最後に足の速い子につなぐ為にはそれまでの過程でいるいるなメンバーが目立たないプレーで苦勞しなくてはならないという意味。「一人はみんなのために」も「みんなは一人のために」もチームが一つのまとまりという訳じゃなくて、15人が独立してチームメートの為に個人のカラーを出す。

自己犠牲という言葉は自分のカラーを消してチームに尽くすってイメージがあるよね？ チームの駒になりきるってことじゃないの？

チームに動かされるのが「駒」、チームの為に動くのが「自己犠牲」。

チームの為に動くために一番大切なのが持ち味を作ること。

持ち味を作る？

持ち味を生かすって言葉が好きみたいだけど、そもそも持ち味を作らなきゃ生かせな

いでしょう？

だからそれは、足が速いとか、パワーがあるとか・・・

それもまあ持ち味と言えれば持ち味なんだけど、「特性」だけじゃだめ。 **持ち味は作るもの**。足を速くする為のトレーニングとか、パワーをつける為に地道な筋トレもする。その上でたとえば俺の場合「縦に直線的に突っ込むプレー」これが俺の持ち味！

「持ち味は作るもの」この言葉を聴いて私はドキッとした。たしかにわたしは「持ち味を生かす」という言葉を安易に使いすぎていたかもしれない。あらためて辞書で「持ち味」という言葉を調べた。

もともと備わっている味 **他のものにはない独自のよさ**
は特性だが、 はどのように考えるべきなのか？

こうして「持ち味を生かすとは？」というこのインタビューのテーマが誕生した。

以下インタビューの報告はラグビーの試合形式に則って報告していくことにする。

では **KICK OFF!!**

～ 前半戦 ラグビー選手としての持ち味 ～

とにかく 1人1人が「自分がどういうプレーヤーになりたいのか」というイメージを持っていることが何よりも大事だと思う。そのために持ち味を磨いて、また磨いて、それがチームの実力アップになることは間違いない。今までやってきて本当にこれはそう思う。 1人1人が実力を上げることがまず大事。そのプロセスが抜けてて、チームがまとまる精神だけ言ってもムリ。しつこいけど、チームづくりにはこの第1段階が本当に大切。「あの人は才能に恵まれてるから」という言葉でかたづけられる人はちょっと違うかなあと思う。

これまで息子の話を聞いていると「チーム」という言葉より「チームメート」という言葉を大切にしているように思える。チームメート1人1人の集まりが「チーム」であることの意識がしみついているようだ。**私が息子や息子のチームメートから感じた真摯な取り組みとは、チームメートの1人である「自分」が、持ち味を生かすために、まず持ち味を作り、その持ち味を磨いていた過程だったということなのだろう。**

うまく言えないが最終試合で、私は「いいものを見せてもらった」と思った。その「いいもの」の代表は「質の高いチームワーク」だったと思う。

さて、息子はキャプテンである。チームワークつまり「自分」から「自分達」になる課程で、一人一人の持ち味を消さずにどうやってチームを作っていたのだろうか？

それではこれからは「米田キャプテン」に伺います。キャプテンの仕事って何ですか？
結構キツイ仕事だった。かなり責任のある立場だった。人への配慮も必要だし、いろ

いろな人の意見を取り入れなくちゃいけないんだけど、「最後は自分が決める」という覚悟と自分の意見を強く持たなくちゃいけない。自分が正しいと思ったことを人にわからせるのがとても大切。そして「これを言ったら誰かが衝撃を受けるだろう」「誰かが立場的に不利になるだろう」と思っても言わなくちゃいけないことは言うしかない。正直「ヤバイ」という場面や「化かし合い」みたいなところもあったね。あと、自分のプレーでしょげたりしていても、自分の精神状態に関係なくチーム全体のことを言っていかななくちゃいけない。いずれにしても淡々とものを言うことが大切。

一人ひとりの持ち味が出揃ったところで、今度はそれをチームにする「チームづくり」の段階っていうのがあるわけだね。そこではキャプテンとしての持ち味が必要になってくると思うんだけど。一人一人が選手としてのオリジナリティをもっていたとしてもバラバラに動いていたらチームにならないわけしょう？

俺の場合、あまり強いチームのキャプテンじゃなかったから、「勝とう！」重視ではなくて「楽しめるラグビー」っていうか・・・遊んでいて楽しむって意味じゃなくて、ラグビーやっている意味をみんなで解り合うことが大事だと考えてミーティングをたくさんやった。その上で自分達がめざすべきチームの目標を俺が設定して、練習メニューを考えた。人の持ち味を理解する過程では衝突が生まれやすい。必ずチームがバラバラになっちゃう時がある。でも解決法は持ち味を殺すことじゃない。意見を変えろということでもない。説明が難しいなあ・・・キャプテンの役目はとにかく淡々と相手の考えていることを理解する・・・。

でも理解してもまったく逆の考えで、譲り合えないときがある。ここでキャプテンは権力者になる。ここに指導者としてのキャプテンの意味がある。

とにかく、みんなの意見は聞いたけど、「その上で俺はこう考える」ってこと言ってかなくちゃいけない。これが大変といえば大変。

だから責任というのは、俺の場合みんなの達成感というか、最後にみんながどういう終わり方するのかは正直とても不安だった。だから最後にいい試合ができたのは、目標を達成できたかなという点で、ほっとしてるし、まあ今の自分の自信にもなってる。キャプテンやってたことで他の人とは違う感慨があったかなあ　と思ってる。

ここで前半戦は終了する。

我が家のリビングに飾ってある最終試合の写真を改めてみた。　どろまみれ、汗まみれ、目はすわり、ヘッドキャップの間から髪は逆立ち、スクッと立っている息子の写真。そしてもう一枚チームの写真。中学高校時代に自らの手で貴重な思い出と友達を手にした息手に拍手を贈りたい。

～ハーフタイム～

ねえ思ったんだけど、これって早稲田のレポートだよな。あの「大学ラグビー優勝の」・・・いろいろ勝手なことしゃべってヤバくない？
そ、そういえばそうだよな。　まあでもいいよ。いまさらもう遅いしさ。

～ 後半戦 日本語ボランティアとしての持ち味～

さて、ここからが辛い後半戦の始まりだ。前半戦で「持ち味」という言葉の深さに気づいた私。今度は自分の「持ち味」と向かい合う番だ。「子育て経験者としての持ち味をボランティアに生かしたい」と思っている以上、子育てによって備わった私の持ち味とは何か？ということをはっきりさせなくてはならない。そしてその上でボランティアプレーヤーとしての持ち味作りを考えていこうと思う。

そういう観点から改めて考えてみると、子育てというのは「責任転嫁のパスが許されない活動」だと思う。面倒くさいから、困りきったからといってほうり投げることはできない。だから困った時はいろいろな人に助けってもらったり、そして助けたりしながらここまでやってきた。子育ては絶対に一人ではできない活動だったと断言できる。

我が子を授かったことで、それまで持ったことのないような「思い入れ」を持って、悩んだり、感動したり、怒ったり、安心したり・・・心を動かし身体を動かし頭を動かしてきた。その過程にさまざまな場面があり、出会った人々がいる。築き上げてきた人間関係がある。ラグビー部活動の経験はもちろんその中のとても大切な一つだ。

地域でしっかりとした人間関係を作ってきた経験と、人への「思い入れ」そしてそこから生まれた「役に立てることをしたい」という気持ちをまずは「持ち味」としていいのではないだろうか？ ABILITY というよりは **CAPACITY** のようなものを・・・

息子に意見を聞いてみた。 ＊＊ラグビーの話よりはちょっとつまらなそうな顔＊＊

たしかにそれはそうなんじゃないの。家に生徒なんかよく来るよね。その様子を見てみると「信頼はされてるな」って思うよ。なんか楽しそうだしね。子育て経験のその「capacity」ってもんはあるんじゃないですか？ ラグビー部の行事なんかずいぶんやってきたから、行事は得意だし、そんなものもボランティアに生かしてるでしょ。あと生徒のやってることとか、生徒からもらった手紙とか、生徒の日本語の上達ぶりにはいつもえらく感動してるから、そういう気持ちが生徒にうまく伝わって、家に遊びにきたりするようになってるんじゃないの？

私自身の子育てのスタイルとしては、見守ることで「持ち味を引き出したい」というスタンスがあったと思う。私は趣味でパンを焼くが、パン作りの工程で一番好きな段階が「釜伸び」だ。作り手の手を離れてオープンの中で生地が自分で伸びていく。第2次発酵をちょっと手加減する方が、つまり手をかけすぎない方が自分でぐんと伸びる。すでに大きく膨らんでしまっただけ焼き色がついただけのパンよりずっと弾力がでる。この釜伸びをイメージして子供も育ててきたし、だからのびのびと「釜伸び」しているように見えた息子やチームメートの姿に魅力を感じてきたのだ。ボランティアの生徒にも釜伸びを見守る姿勢で接することにより、それぞれの持ち味が引きだせればいいなと思う。親が同じ思い入れをもって育てた息子達だってそれぞれの持ち味は全く違う。持ち味の違いに会い、それによってもたらされた展開に真剣にむきあうことに親や先生はその役割の醍醐味を見出せるのではないだろうか？

僕が思うに、子供であれ、生徒であれ、自分を人に浸透させることは不可能だと思う。僕だって親や先生の影響は受けているけど、その人が浸透しているわけじゃない。

なるほど息子の側からすると、「釜伸びする」は人の浸透を受けずに自分で伸びた過程と解釈するんだあ・・・。私の立場からすると「釜伸びさせる」の解釈は、余計な手出しをしないサポート、静観、ある意味甘やかさないって意味なのだが。この視点の違いは面白い。私は誰に対しても自分を浸透させようなんて思っていない。そうだ。生徒に日本語を浸透させるのではなく、日本語を使って生徒が自分で釜伸びしていけるようにサポートしていけばいいのではないだろうか。だんだんと持ち味づくりのイメージが出来てきた。

次に私の「持ち場」を考えるとちょっと気が重い。さまざまなケースへの対応が求められるボランティア活動においてこれは簡単に答えの出せる問題ではないからだ。

息子の最終試合で「質の高いチームワークを見せてもらった！」と感じた私。その質の高さとは、みんなの思い入れが大きなところでまとまっていて、それに向かって各自が持ち味を発揮していい仕事をする姿。これが共同体の理想ではないだろうか？と思えた。それでは逆に考えていくと「質の低いチームワーク」とは、みんなの思い入れがまとまっていなくて各自がバラバラに動く、あるいは全体のバランスだけをとても大事にして各自が持ち味を消す、あるいは持ち味作りをおろそかにしても許される共同体ということになる。私という「自分」がボランティア活動という「自分達」の一員として活動してきた中で時々考えてしまったのは「人を尊重する」ということだ。ボランティア教室は教える側も教わる側もさまざまな参加の仕方があるだけに、考え方もバラバラで、その中で自分が何をすべきなのか、何をめざすべきなのか？を見極めるのが難しい。

キャプテンの立場について語った息子の発言にたくましさを感じた私は「人を尊重するとはどういうことか？」という私の迷いを息子にぶつけてみることにした。

人をまとめるって大変なことだよ。きちんと自分の意見を言うことも大切だけど、ずいぶん言葉を飲んだりしない？ みんなの意見は聞けないし、でも人の意見を尊重したいし・・・ 私が世話役やボランティアやっいていつも悩むのはそこなのよ。どうすれば自分の意見をはっきり言いながら 人を尊重することになるのかがいつもわからなくなっちゃう。自分の意見は持ってるんだけど、それを何パーセントくらい言葉に出しているんだろう？なんてこのごろよく思う。ここではやめとこう。今はやめとこう。この人にはやめとこう・・・て 自分の持ち味なり意見なりを確立しても、それを表に出せないってことは、結局は人を尊重するのが一番むずかしいなあとと思うときもあるんだけど。

たしかに言葉は飲むよ。それはだれでもそうでしょ？ 俺の場合だと口に出すのは何パーセントかなあ。10パーセントかもね。それは、キャプテンに限ったことじゃない。でも、チームづくりの場合は、だからときには「化かしあい」なわけよ。

この人には言って・この人にはやめといて・この人には半分だけ言って・・・とか。(笑)でもキャプテンはそこに集まった人の代表じゃない。世話役じゃない。やはり言うべきことはきちんと言うしかない。キャプテンにとって人の意見を尊重するってことは、

人の意見どおりに動くことじゃないと思う。一応すべて聞いて、自分なりに消化して、**その上で自分で決断する。俺はこの過程が「尊重した」ということだと思ってる。**消化したうえで自分の意見なわけだから。俺にとってはやっぱり人を尊重するより自分の持ち味というかオリジナリティの確立の方がずっとむずかしいね。

どうして？

自分が人の意見を尊重したか、つまりさっき言った消化の過程をきちんと踏んだかどうかは自分が判断もできるし評価もできる。だけど自分の持ち味とかオリジナリティはできたかどうかなんて自分で判断できないでしょ。自分のオリジナリティなんて永遠の挑戦なんじゃないの？

なるほど。そうか・・・なるほどね。でも君、そうとう強いね。

強くなった。キャプテンをやったことで自分なりに人を尊重できるようになったと思ってる。先入観をすてて相手の言うことを真摯に聞くことができるようになった。でも最後には「自分がいいと思ったことを信じてやろう、それによって何がおこってもいいや」って腹がすわってきた。

なぜ先入観を持たないことが大切？

自分自身の意識を持って聞いてしまうと、聞いているそばから反論を考える。消化しなくなるから。

ビビィー 後半戦終了 ラグビーでいうと NOSIDE

最後にもう一つだけ、前からぜひ聞いてみたかったフレーズについて聞いた。ラグビーには**野性・知性・感性**が必要だという。野性はわかるが、なぜ知性が必要なのか。また中学の時の息子の指導者は「大胆且つ繊細なスポーツ感性を磨け」と度々訴えていたが、

大胆且つ繊細にプレーをすることはどういうことなのか？

まず大胆にということ。これは一言で言うと『あるプレーに踏み切る勇気を持って』ってこと。『自分がこうと思ったプレーは迷わずやれ』、たとえば試合中「ここはキックだ！」と思ったとする。そうしたら自分を信じてかなり強気にいけ。中途半端が一番よくない。野球のピッチャーだって同じだと思う。次は「内角だ」と決めたら中途半端が一番よくないわけでしょ。ただしやってみるとよくわかるけど、この瞬間ってかなり強気になる。で、ここが肝心なんだけど、強気だけでプレーが雑になってはダメ。実行に移すときはある意味冷静になって『今まで練習でやってきたことを緊張した場面でもだせるように丁寧に行け』ということだと思ふ。ここが一番練習の意味が問われるところ。そしてその状況判断にはかなり知性が必要なのかな。

なるほど「大胆かつ繊細に」これはとてもいいフレーズだ。**判断力、決断力、責任感**、私自身が大事だと思ひ、子供にも身につけてほしいと願ってきたことすべてが詰まっているフレーズだ。こういう意味からも息子を育ててくれたラグビーというスポーツにあらためて感謝したい。

もちろんボランティア活動も「あつい思い」だけでできるものではなく、冷静な状況判断が不可欠、このフレーズを私の人生にも拝借しよう。息子の言葉を借りればパクなのだ。

予想してたよりずっといい話ができよかった。どうもありがとう。
さあ、これからはいよいよ大学受験へむかうわけだね。現状はかなり厳しいと思うから、「大胆かつ大胆に」成績をアップさせていってくださいな。
「野性を生かしてがんばります」ってことで。

結 論

常に進行形の親子関係の中で、高校時代の息子との対談を形にできたことで、結果としてこのレポートも貴重な財産である「記録」の一つになった。いやむしろ「記念」になったというべきだろう。

ラグビーの世界にいる息子の口から飛び出した「持ち味を作らなきゃ生かせないでしょう？」という言葉を引きかけに「持ち味」という言葉の深さについて改めて考えさせられたことは今後の貴重な財産になったと思う。

今回のインタビューで私は2種類のエネルギーを息子にもらった。

持ち味は磨くもの

この言葉によって、私は今持っている持ち味を核として大事にしながら、今後さまざまな影響を吸収・消化しながらさらに持ち味をパワーアップさせていく右肩上がりのイメージを頭に描くことができた。

日本語教育者としての「持ち味づくり」は生徒との出会いとそれによってもたらされる展開を大切にしながら、常に「考えること」をおろそかにしないことだ。

動機に書いた「子供あつての親」「生徒あつての先生」という曖昧な表現を、**お互いがお互いの影響の中でお互いの持ち味を磨いていく過程**だと私は結論づけたい。

人を尊重すること

さまざまな状況の中で「自分」が「他人」とどう関わるか？これは難しいテーマであると私は思う。はっきりと意見を言った方がいい場合。言葉を飲んだ方がいいケース。しかし**「人の意見をきちんと聞いて、言いたいことを理解・消化した上で自分の意見を言う。この過程こそが尊重なんだ」**という息子の言葉からは、彼なりにくぐってきた月日を感じられる。キャプテンとしてあっぱれな発言だと思う。

感心してばかりはいられない。「責任を果たす立場」ばかりやってきて「責任を取る立場」から守られてきてしまった主婦としての私の甘さ・弱さを認識するいい機会にしなければならない。もちろんこれからも人の気持ちを大切にしたい。そして人の役に立って生きていきたい。しかしもう一歩踏み込んだ強さを身につけなければならないと悟った。発言すべき言葉まで飲み込んでいる今の自分をリセットしよう。

「子育てをしていなかったら間違いなく今の私はいない」あらためてそう思う。そしてその「今の私」が忘れてはならない息子の魅力を最後に確認しておかなければならないだろう。

それは「答えない理由がないから」というぶっきら棒な言葉で、3回もの母親のインタビューに根気よくつきあってくれたこと、そして自分がやってきたラグビーについて、質問に誠実に**自分の言葉で自分の意見を言ってくれた**ことだ。これは今後の私への貴重な応援メッセージであることにも気がついた。

メッセージをしっかりと胸に刻んで、改めて日本語教育界というグラウンドに立ち、場を読んで、間をとりながら頑張っていきたい。グラウンドを広く使って、しなやかに走り回ろう・
大胆・・かつ・・繊細に

終 わ り に

最近読んだ本の中に「モードが違う」という言葉があった。人にはいろいろなモードがある。つまり私の場合だと「母としてのモード」「ボランティアとしてのモード」「主婦としてのモード」などがあり、それぞれモードが変わると生きるスピードが変わり、見えてくるものが違ってくるはずだ。という意味であった。私が大切にしている **CAPACITY** を考える上ですばらしい言葉だと思った。いずれの場合も私の本質はひとつなのだが、インタビューは母親モードであったから、ここからはモードを切り替えて書いていこう。

～早稲田モード～

「文章を書く」という作業はとても大変だが大切なことだ。

特に自分の意見を表現した文章というのは自分の意見を目に見える形として提示する、いわば「意見の責任所在をきちんと自分に置く」ということを意味している。この点はその辺の世間話や、批判を受けるというリスクを負わない場面でわめいているだけの勝手な意見とはまったく性格が違う。書いた以上は、批判や酷評にさらされながらも自分の考えと向き合い、言葉と向き合っていかなければならない。だからやがてこの書く訓練は「責任ある発言」にもつながっていくという意味で大切なものだと思う。

今回この「言語文化」の活動を通して、言葉と書き手（話し手）とは決して切り離せないものだと感じた。言葉は書き手によって生み出され、選択され、表現される。だからこそ、同じクラスで活動しても、個性豊かな、持ち味あふれるそれぞれのレポートができあがっていくわけだ。文章磨きを考えるならばまず自分磨きに取り組まなければならない。まずこれが最初で文章テクニクは二の次だとつくづく感じた。

責任ある文章を書くことへの大事なプロセスとして、この活動では話し合いにより「思い込み」を取り除いていくということが度々行われた。誰かの意見の受け売り、ステレオタイプ、集団類型化、独りよがり・・これらのことを各自の文章の相互検討という作業を通して検証していくという過程は面白かったが、私はもともとステレオタイプの考え方には否定的だったから、この点で私が受けた考え方の変化はあまりない。

「思い込み」さえなくなれば、責任感がでるのだろうか？いい文章になるのだろうか？数学の証明ではないので、論理的なだけでは味気ない。私は「思い入れ」も不可欠な要素ではないかと感じた。

このレポートも相当の思い入れがなければ最後までやり遂げることはできない。インタビュー対象者に対する思い入れ、この授業をとった意義に対する思い入れ、伝えたいテーマに対する思い入れがあるからこそ、各自は一生懸命言葉を紡ぎだしてきたのだと思う。そしてその紡ぎだしの過程で、「思いを込めて書いたとしても、独りよがりな表現では決して人にその思いを伝えることはできないのだ」という大切なことにも気がついて、それぞれがまた言葉と向かい合っていた。

この授業では「思い入れ」をもって、「思い込み」を持たず責任ある文章を書いていくことの大切さを学んだ。

* * 早稲田モード P A R T 2 * *

私はもともと「まったく近頃の若者は・・・」という言葉に興味を持っていた。エジプトだかメソポタミアだかの古代遺跡からもこの言葉が発見されたと聞き、この言葉の歴史の深さ、つまりそんなに長い期間この言葉がくりかえされているという事実に感心？していたからだ。「近頃の母親」の一人である私から見ても、乱れた成人式の映像や、数々の少年犯罪をみると「まったく近頃の若者は」と言いたくなる場面が多々ある。しかしこの言葉には、そういう若者を育てた親、そしてそのまた親である大人の責任所在が含まれていない。目に見えないグループを作り上げて、責任転嫁のパスをしている言葉であると解釈もできる。

そういう意味もあって今回私は「近頃の若者」の一人である息子と正面から向かい合ってみようと思った。茶髪で、朝になると携帯電話と家の鍵の発掘を始めるだらしない「米田キャプテン」。親としてはいろいろ文句もあるが、今回の彼は私の17歳の時よりもあきらかにすぐれている点がある。

それは明確で責任ある発言、そして何よりも注目すべきは「ひとりひとりの集まりがチームなのだ」という感覚が当たり前になっていることだ。「まずひとりひとりが持ち味を磨いていく、それがチームの実力アップになることは間違いない。この段階が抜けていてチームがまとまる精神だけ言っても無理」これは貴重な考え方だ。チームワークの大切さをまず教え込まれて協調性を身につけていった私自身とは逆のプロセスで息子は協調性を身につけていったという気がしてならない。それが発言力にもつながっているのだろう。夫婦、家族、チーム、クラス、日本 もとをたどれば一人一人の集まりだ。まず自分磨きが基本だ。このクラスで何人ものすばらしい「近頃の若者」に会えたことは本当にうれしかった。目標にされるようなオバサンにならなくてはならない。

* * 主婦モード * *

このクラスでは「自分をくぐらせて書く」「顔のある文章を書く」ということが目標とされた。では「くぐらせる」とは何か？ 主婦モードで私なりの解釈を述べたいと思う。主婦の私が「くぐらせるもの」は例えば「鯛」である。鯛という魚をさばくときは包丁を使わずに手で開く。それを刺身にする時は「たて塩」といってさっと塩水にくぐらせる。

くぐりぬけた鰯は、汚れがおち、身が引き締まった上に、なぜか弾力性が加わって、ピンとなる。つけ浸しのマリネとは全然食感が違う。このことから鰯は塩水の中をただ通過しただけではないことがわかる。塩水の正体はよくわからないが、とにかく、くぐらせたあとは「サッパリ感」と「弾力」が決めてである。できれば凜とした姿がのぞましい。

以上、私にとって日本社会に暮らすとは？

日本で生活している人との日々の関わりの中で、自分の持ち場を判断し、責任ある行動、責任ある発言にこだわり、人に対する配慮と尊重の気持ちを大事に生きる。またそんな中で日本に生まれた縁を大切にして、桜や若葉、紅葉など四季の移り変わりに心動かし、旬の味覚を大事にする感性をも大切にしていく そんな毎日のことである。

「言語文化」の NOSIDE

ラグビーの試合終了を意味するノーサイドという言葉には、試合が終わった瞬間から敵も味方もなくなり、プレーヤー全員が同じ時間、同じ場所で密度の濃い時間を過ごせたことを認めあい、讃えあうという意味があるそうだ。

この3ヶ月間、クラスの中はすべて味方だったが、それでもさまざまなプレーが展開された。するどいタックル(コメント)、誠実なフォロー、ナイスサポート! などなど。それらのプレーを積み重ねながら信頼感を育ててきた仲間が解散するのはとても寂しい。チームメイトいや、クラスメートのみなさん

「一緒にやれてよかった! ありがとう!」

三代さん、細川先生、お二人の重量感のあるタックルに私は何度も転びましたが、その都度スクッと起き上がった自分の中の「若さ」を信じて頑張っています。ありがとうございました。

さてようやく出来上がった私のレポート、まだゴールまでは運べなかったと思う。でも、ここで深呼吸して、たくさんの思いを込めた「私のボール」をもうそろそろ誰かにパスしてもいいかな・・・ じゃ、まずは「米田キャプテン」へ

今回はサンキュー **パス!**

